

### 文明が暮らしを変えた

今日は大変難しい題でありますのに大勢の方が来られて、うれしく思っております。

「人間、科学、文明」をどういうふうに関係づけて話をするか、いろいろ方法があると思いますが、今の状況からさかのぼって考えてみたいと思っています。今の状況は、何と言っても、科学の力というのは非常に強い。私の子供のころと比べるだけでも、こんなに変化をした時代はないのではないかと思います。

私は、丹波篠山という田舎の人間ですので、子供時代は飛行機なんて時々しか見られないもので、あれに自分が乗るとは絶対思いませんでした。実際、飛行機が飛んできたら、小学校でも中学校でも必ず、先生が「君たちも見たいだろうから、少し授業をやめて見よう」と、本当にやめて見ました。そんな状態だったのが、今は何百人という人間が乗って、ヨーロッパやアメリカに行くようになった。

それどころか、ロケットで火星まで行って、火星の探検ができる。もっとすごいのは、月まで人間が行って帰ってきた。そういうふうに関係づけて科学が進んできて、この建物や、マイクロフォン、それから皆さんが着ておられる服は、全て西洋風です。その西洋の近代に生まれた文明は、今では世界を席卷していると言っていいのではないのでしょうか。

私の兄は、サルの研究をしていますので、アフリカなどによく行きます。アフリカへ行きますと、人たちがお祭りに火をたいて、踊るのです。それがとても素晴らしいと思っていたら、最近、みんなTシャツを着て、Gパンをはいて踊っているらしい。「残念だ。前はすごかったのに」と言うと、「いやいや、もうこれを着ないと駄目なんだ」と言う。文明に遅れてしまうという意味でしょうね。だから、そういうところまでアメリカの影響、あるいはヨーロッパの影響が入ってきており、世界中がそうだといいと思います。

### 豊かさの中で心の悩みが増えた

そんなふうに関係づけて、何もかも良くなって、日本人は全体としてすごく幸福になったかと言ったら、みんな割と暗い顔をしているのじゃないですか。物とお金を持っているのに、みんな暗い顔をして生きているのは、科学の成果や、これだけの物の豊かさをどう自分の幸福に結びつけるか、ということが分からなくなっているからじゃないかと思います。

その例によく挙げるのは、実際に私のところに相談に来られた方の話です。見るからにみすばらしい服を着て、暗い顔をして、「これはだいぶ経済的にも困っておられるのだな」と思って会いましたら、何のことはない。ものすごい遺産が転がり込んだという人です。遺産をもらったときはうれしかったが、しばらく経つと「寄付してください」と来るのです。でも、寄付しても誰も喜ばない。腹が立つから「寄付はしない」と言ったら、ケチだ

講師 河合隼雄（文化庁長官）

と言われる。友達が寄ってきて、皆におごって、飲んだり食ったりしているうちはいいのだけれど、みんなあまりありがたがらない。当たり前、という顔をしている。集まってくれる人間が自分のために来ているのか、遺産のために来ているのか分からなくなってしまふ。人生、面白くないから、もう死のうと思います、という話でした。

私は、「もうあなたの診断ははっきりしていますよ。これはイサン過多ですね」と言ったのです（笑）。今、日本は少しこの遺産過多の状態と似ていますね。みんなで頑張っ、て、お金もうけて、物が豊かになった。そこで、よその国に寄付したり、お金を出したりしても、そう感謝もされていないし、出さなかったら嫌そうにされる。そして、お互いが何となく暗い顔をして生きている。これはどこに問題があるのかということを考えねばなりません。

私が心理療法を始めましたころに、「河合さん、そのうちに社会が進歩して、みんなが幸福になったら、心の悩みなんてなくなる。河合さんの商売もあがったりになるよ」と、よく言われました。その時私は、「全く間違っている。世の中が進歩するほど、心の悩みは増えますよ」と言っていました。物が豊かになると悩みがなくなるというのは大間違いです。例えば、医学が進歩してみんな長生きするようになって、昔は「孝行したいときには親はなし」という言葉がありましたが、今は、「孝行はしたくないのにまだ生きている」とか言われて（笑）、そんな状態になってきたわけです。長生きするのがいいのか、悪いのか、大変難しいですね。

### ストレス社会が広がっている

ヨーロッパなどへ旅行に行かれる方も多くなりましたが、海外旅行してきた人に「どうだった」と尋ねたら、「とにかく日本食が食いたかった」とか、そういうことばかり言っている人がいます。旅行に行ってすごいストレスを持って帰ってくる。これって本当によいのでしょうか。今の社会はいい事があるように見えながら、ものすごくストレスの高い社会だと思います。

皆さんご存知だと思いますが、拒食症という病気があります。ご飯を食べない、食べられない。中には、食べれなくて死んでしまう人さえおられます。こんなノイローゼは、食べる物の無いところには絶対あり得ません。日本でも食べる物が豊富になってからは、たくさんの方がこのノイローゼになっています。科学技術が発達するという事は、なかなか大変なストレスです。

もう一つ非常に大事な本質的な問題があります。科学が発達して、自然科学と技術があれば何でもできる、という思い込みが少しつよすぎるのではないかと思います。例えば“ I

講師 河合隼雄（文化庁長官）

「IT革命」という言葉があります。今、携帯が手のひらにおさまるぐらいの大きさになりましたが、もっと小さくなって腕時計ぐらいになる日もくるでしょう。ちょっと押したら「ロンドンに雨だ」、「シベリアは、雪が降っている」とか、世界中の気象が分かってしまう。ある人が「河合さん、これを押すだけで、世界の気象が全部分かる」と言ったので、「あなた、世界の気象は全部これで分かるけど、お宅の中で嵐が吹いているのは知らないでしょう」と言ったのです（笑）。世界中晴れていると思っていたら、家にいる奥さんだけ台風の低気圧のど真ん中におられて、帰ったらすごい嵐が吹いていたりするということは、ITでは絶対分かりません。そっちのほうが大事だと、皆さん思いませんか。

### 人の心はボタンでは動かない

私のところへ、息子さんがずっと学校へ行かない方が相談にこられました。私が京大の教授をしていたときでした。その方は入って来るなり、「先生、先生は京大の教授でしょう」と言われるのです。「そうです」と言ったら、「考えてみてください。ここまで科学が発達して、上手にボタンを操作すれば人間は月へ行っても帰ってくる時代に、うちの息子を学校に行かせるボタンはないんですか」と。おまえは京大の教授をしていてそれも知らないのか、という感じでした。私は「そんなの、すぐできますよ。今日、子供さんが眠られたら、すのこ巻きにしておいてください。それを担いで行って、あした、学校へほうり込みますから。そしたら、登校していますよ」と言ったのです。すると、「それは困る。息子が自分で学校へ行ってもらわないと困る」と言われた。お父さんが、息子が学校へ行ってくれなければ困る、と言った途端にボタンが無くなるのです。どういうことかと言うと、科学技術の力では行かせられない。私が「すのこ巻きにして放り込む」と言ったのは、子供を物扱いするのであればできるということです。

今日は人間のことをいろいろ考えておりますが、人間というものも、きちんと科学の対象にできますね。例えばエレベーターに乗るとき、何人まで乗れるのかというのは、だいたい一人あたりの体重と総量を考えるのであって、その人がどんな人なのかは、全然考える必要がない。要は体重だけの問題です。皆さんがここから出られるときに、どのくらいの出口があったら混乱が起らないか、というのも大体計算できます。けれども、親子というようなことが入ってきた途端に、これができない。なぜかといいますと、今我々が言っている“科学”というのはヨーロッパの近代に起こって確立された、近代科学です。観察する人間と観察される物とは関係がないようにして客観的に観察する。例えば、物が落ちてくる速さを研究したり、物の重さを研究したりする時、私が測ろうと、あなたが測ろうと、どなたが測ろうとも同じです。ところが「この時計、なかなかいいでしょう」な

んて言う、思っていなくても「いいですね」と言っている人は、これは人間関係で言っておられるわけです（笑）。人間というのは、大抵何らかの関係の中で生きているのです。

### キリスト教が自然科学を生んだ

中国では、花火の元になる火薬をヨーロッパよりも早く発見し、作り方を知っていたのです。そのとき中国は、専ら花火を研究するのです。ある程度、戦争で敵をびっくりさせるためには使っていましたが、人を殺傷できる完全な武器にすることを中国人は考えなかった。けれども、ヨーロッパの人は武器をつくる事を考えた。だから、ヨーロッパに出来上がってきた近代の武器が、ヨーロッパがほかの国を植民地化するときに、大変役立つわけです。

なぜ、それができたか。ここは解釈の分かれるところですが、私は背後にキリスト教の思想があると思っています。キリスト教の場合は、神と人ははっきり違う。人間はいくら逆立ちしても神にはなれない。それだけではなくて、神は、人を神に似せて作られた。そうすると、人間とほかの動物・植物とは違うという、非常に明確な区別がついているわけです。もともとの信仰の世界から区別するということがとても明確にありますので、その態度が、自然科学が生まれてくる一つの根本になったのではないかと、私は思います。

医学でいうと分かりやすいと思いますが、医学の場合は、研究する者と研究される対象が分かれているというだけでなく、心と体も分けている。はっきり分けて人間の体を客観的に研究すれば、医学が進歩するのではないかと、西洋の近代医学は考えたわけです。そして、今までの医学よりも圧倒的に進歩するわけですね。病気になっている人体を客観的に観察する。そういうふうに医学が進歩したおかげで、我々が長寿になっているのは、非常にたくさんの病気が前よりも治せるようになってきたからです。近代医学はとても進歩し、まだ進歩すると思います。

### 人間と人間との関係を考える

ここで今日、医学の関係者が悩んでおられるのは、例えば、近代医学でいうと、診察に来られた方が癌の末期症状で、余命1カ月だと分かります。それは告知しようと思ったらできるし、このごろ本人に告知する医者も多いらしいです。ところが、癌になった人が「私はこの1カ月をどんなふうに生きていいんですか」とか、「なぜ、私がこんな癌になるんですか」と言われたら、「それは医学とは関係ございません」と言っても話になりません。その人はそれが知りたいのですから。実際、私の知っている人で、そう言った人がいます。

自分ということが入ってきた途端に、話がガラッと変わる。このことを、ノンフィクション作家の柳田邦男さんがよく言っておられます。人間というものは、人間はどうなったら死ぬかとか、人間の死とは何かということは研究できますが、私の大好きな人がどうしてここで死んだんだろうとか、私が死ぬとは一体どういうことだろうなどと、自分のことが入ってくると客観的研究はできない、と。

私のところに相談に来られた方で、恋人が目の前で交通事故で亡くなったという人がおられます。この人はものすごく気分が沈んで、何もする気がなくて、仕事どころか家に閉じこもってばかりおられた方で、とうとう相談に来て、「どうして、恋人は私の前で死んだんでしょう」と言われます。そこで私が、「あれは出血多量です」などと言ったらどうなりますか。出血多量というのは自然科学の答えです。間違っただけではありません。でも、その人の聞きたいのは、「どうして、よりによって私の目の前で」ということが言いたいのでしょう。「それを私はどう受けとめたらいいんですか」と問われているときに、「出血多量ですから、それは仕方ないですね」などとはならない。先程も言いましたように、自分というものがそこに関係しだすと、どうも自然科学では解決できない、難しい問題に直面します。我々が生きていくということは、すなわち、一体私はどう生きるのか、私はどうなるのか、私はなぜ死ぬのか、というようなことをどうしても考えねばなりません。そのときに「それは宗教です」と簡単に言ってしまうと、もう少しそこを研究できないでしょうか。

そこで、私が考えましたのは、近代の科学と違って、人間と人間、あるいは人間と花など、こういうことに関係があるところで、研究をやってみたらどうだろうかということです。人間と人間が関係する中で、人間の研究をしなければうまくいかないのではないかと、私の修得の中で思いましたのです。

### 子供と話をしてみよう

簡単な例を言いますと、非行をやって、シンナーを吸っている子がいるとします。そういう子呼んで来て、「シンナー吸ったら駄目じゃないか」、「これからはやめるんだぞ」と言って、その子の返事がよくても、しばらくしたらまた吸っています。ところが、私がそういう子に会うときに、どうしているかという、「こんにちは」と言うだけです。別にシンナーのことも何も言わないし、「どうですか」と言うだけで、その子は何を言っても構わないという姿勢でいますと、「いやあ、こんなところに来ては仕方ないけどな」と言うから、「うーん」と感心して聞いていたら、「大体、うちのおやじがここに来ておまえに説教されたらいいって言ったんだ。僕が来たかったわけじゃない。」と言う。「うーん、

お宅のおやじはな……」と言っていたら、おやじはどんな悪いヤツかなど、だんだんと色々話してくるのです。

私に話しているうちに興奮して、「うちのおやじみたいなん、死んだほうがマシや」と、どなった学生がいるんです。それでも、私がうんと聞いていたら、しばらく沈黙したあとで、「学費は、…おやじが払っているんですが……」などと言います。面白いですね。「あいつは死んだほうがマシ」というのと、「あいつがいなくては学費はない」というのと、この両方を考えて結論を出さなければいけないのですが、なかなか人間というのは、両方考えずに「あんなクソおやじ」と考えたり、格好だけで考えたりしているんです。ところが、ゆっくり話を聞いてくれる人がいると、あれも考えられる、これも考えられる。それで考えているうちに、その人が自分で答えを見つけていくわけです。

いろいろな人の相談をしているといっても、私が答えを言うことは非常に少ないです。来られた人はみんな自分で考え出す。しかし考え出す前に、おやじの悪口を言ってみたり、おやじのいいことを言ってみたりされる。そして、私のところから帰るときに、「先生にこんなことを言うとは思っていませんでした」と言う人が非常にたくさんおられます。

先程の方などは、「恋人が死んで、もう自分も死にたい」と、その気持ちだけで来ておられるわけです。ところが、私が「そうなんですか」と聞いているうちに、その人の人生の全体が見えてくる。人生の全体が見えてくると、その人は自分で「じゃあ、こうします」と見つけられるわけです。

そのときに、下手な人がやっていると、話を全部聞けないのです。簡単そうに見えますけれども、なかなか人の話は簡単には聞けないですよ。いいことだけ聞いて、嫌なことを言われたときには本気で聞いていない、という人が多いのです。いいことであれ、悪いことであれ、何であれ、ずっと真剣に聞くというのは、よほど自分を修練していかないと、なかなかそういう人間にはなれません。私はひたすらそれを修練してきたと思っているのです。「お父さん、どうですか」「お母さん、どうですか」とか、こちらが言うと、向こうが「別に」とか、「普通」とかばかり言う。私がじっと待つと聞いてみると、いろいろな話も出て、変わっていくということは、人間関係によって現象が変わっていくのだ、そして、その人間関係こそが大事ではないだろうか、と思いはじめたのです。

### 関係を切らない、希望を失わない

次に非常に難しい問題があります。例を挙げますと、糖尿病の方というのは、今は数値がすぐに出ますから、お医者さんが「お酒をやめて、運動すれば大丈夫ですよ。やりなさい」と言ったら、「分かりました」と言うけれども、全然やらない人が多いのです。それ

で今度来ても、数値が全然変わっていないから、「お酒はどうですか」と言ったら「やめよう、やめようと思っているんですが」と言って飲んでいるわけです。「運動はどうですか」「やろう、やろうと思っているんですけど」と、やっていないんですよ（笑）。私は糖尿病の学会の方からよく呼ばれて、「そういう患者さんにどうしたらいいだろう」「どういうふうに説得したら患者さんがいうことを聞いてくれるか」と聞かれるのですが、私は、こういうふうに、上手に言ったら聞いてくれますよ、という方法はないように思います。「お酒をやめてください」と言っただけで、やめられないから飲んでおられるわけですし、運動しないのもそう簡単にするものでもない。では、どうすればいいのか。答えは人間関係です。お医者さんがお酒をやめろと言ったのに、「いや、少し飲んでいる」などと言われて、腹の中では、怒ったり、あきれたりしているのだけれども、それは言わずに「がんばってくださいよ」と言っても、腹の中のほうの気持ちがパッと相手に伝わって、患者さんも「そんなもん、やめられるか」と思うのですね。

そこで、「そう、飲んでいらっしゃるんですか」と、心の中でパッと切って捨てない。飲んでいても「うーん、そうか、人間ってそういうものか。だけど期待していますよ。いつかやめられますよ」と心底考える。簡単に言うと、関係を絶対に切らない。しかも希望を失わない。「いつか、この人はお酒をやめるんじゃないか、という希望を失わず、関係を切らずに、お医者さんや、看護婦さんが頑張ってもらったら変わるはずですよ」と、私は言っています。

実際、そのとおりにされたお医者さんがおられまして、1年後に会いましたら、ある人の例を報告されました。「河合さんの話を聞いて、うそだと思うけどそういう気持ちで、やってみようと思って診察を続けていたら、もう駄目だと思っていた人が、パッとお酒をやめて、数値も良くなって変わって行かれた。その患者さんは海釣りが好きでよく行かれるのですが、足がすべって、崖から落ちるか船から落ちるかで、もう死ぬと思った時があったそうです。幸いに何かを掴んで助かれましたが、そのときに、こんなに死ぬということが怖いのだったら、お酒もやめよう、となったのです」と言われました。そんな話を、お医者さんが学会で発表されたのです。聞いていた看護婦さんや、お医者さんが「今日の話は面白かったな」と、皆さん喜んでおられるので、次に私が発表する役になりまして「皆さん、さっきの発表、どうでした」と言ったら、みんな「面白かった」と言われました。そこで、「皆さん、面白いと喜んでおられますが役に立ちますか」と問いかけたのです。

### 個別的事実が普遍につながる

「その人が体験されたことは非常に個別的ですが、ひょっとしたら似たようなことが起こ

るかもしれないけれども、その人にだけ起こったことです。何が面白かったのか、何が普遍的なのか。やはり、関係を切らずに希望を持って会い続けるということで、何か面白いことが起こるのではないのでしょうか。ということは、それが普遍的な事なのではないのでしょうか」と言いました。そうすると、「私も今度からすぐに嫌そうな顔をせずに、もう少しつきあってみよう」と思われた医師や、看護婦の方がおられて、やっているうちに患者さんの色々な変化に遭遇されたそうです。考えてみたら、私のやっている仕事のほとんどはそうかもしれません。忠告して良くなる人などは、あまり私のところへ来られません。

どんな忠告もきかない人に私が会っていると、非常に不思議なことが起こるのです。例えば、中学生で学校へ行っていない子が来ます。初めは「学校も行っていないし、お父さんにも迷惑かけているし、お母さんにも迷惑かけているし、早く行かなければならない」とか、「うちのお父さんは、よく働いているし」とか、いいことばかり言っていた子がだんだん、本当はやりたいことがあって、野球やろうと思ったんだけど、お父さんがそれよりも勉強が大事だと言うので野球部に入るのをやめて勉強している、という話になってきて、大体、おやじの言うことばかり聞いていたのが失敗だったのだ、と言い出す。面白いですよ。そういう子は、初め“お父さん”と言っていたのが、だんだん“おやじ”に変わってきたりするのです。そういう言い方になってきて、いくらか自分なりに元気が出てくる。そうすると、お父さんから離れます。

難しいのは、親子というのは離れないと自立できないけれども、離れてしまったら孤立になってしまう。引っ付いていないといけないし、離れないといけないし、という非常に微妙なところを、中学生とか、高校生がやるわけです。だから、片一方では「お父さんはいいところある」、片一方では「あんな親父、もう……」となってきましたね。そうになっているうちに、ある子が「あんなおやじはいないほうが、僕は自分の人生を生きられる。いないほうがいいですよ、先生」と、そこまで言い切ることがありました。私たちは、それはそれで、うんと聞いています。うんと聞いているけれども同意するわけではありません。ここが難しい。うんと聞いているけれども、いいとか悪いとか言うのではなく、「分かった」と聞いて、自分の心の中では「これはこういうことを言っているのか」とその意味を考える。もし、その子が、父親を殴ったら大変なことになりますから。心の中で「やるだろうか、迷っているだろうか」なんて思って帰ってもらったら、実際にあったことですが、お父さんが交通事故で、ひん死の重傷で入院ということになりました。その子は病院へ駆け付けて「もう死んだほうがいい」とか、「いないほうがいい」と言っていたのに、「お父さん」と言って抱きつくのですね。そのときに、やはりお父さんは生きていないと駄目だという体験をするのです。お父さんもそこで親子関係がぐっと密になったら、子供の気持

ちが分かるようになりますから、前の親子関係と変わって「もう少し、おまえも好きなことをしたらどうだ」と変わるわけです。その子が「おやじなんて」と言ったときに交通事故が起こるなんていうのは、私がそうしたのと違いますよ（笑）。私は、子供が言ったことに対して考えて、ここで一言先生に言っておいたほうがいいのではないかな、とか、ここでこうやったほうがいいのではないかな、と思うけれども、ぎりぎりまで待っていたら、パッとそういうことが起こる。

私はその話をみんなの前でしたとします。すると、みんな「今日のは面白かったな。先生、いいところで交通事故が起こりましたね」とか言うでしょうけれど、これ、役に立ちますか。何に役立っているかと言えば、ほかのカウンセリングをやっている同僚たちが、もっと腰を入れて人の話を一生懸命聞き、関係を切らずにどんな話でも聞いていき、たとえ、殺すと言おうと、死ぬと言おうと、がっちりとその人の言うことを聞いていこうという態度が、みんなにできてくるわけです。そういう意味ではとても役に立っているけれども、内容は普遍性を持っていない。このところが非常に面白いですね。

### 本物の話とつくり話と

なら、そんな個別的なことを言う必要はないではないかと言われそうです。紙一枚に、希望を失わずに、関係を持ち続けなさい、と書いていけば、私が心理療法に関する本など書く必要もない。ただ、なぜそれができないかという、そのお話を知って「ああ」と感じるのと、紙一枚で要点だけを知るのとは違うということなのです。結論的には同じところにたどりつくのですが、その間に話があってこそ、みんなが動かされる。人間の大事なところは、知的に知っているというだけではなくて、“心も体も”動かされて動くというためには、何かそういうものが必要なのです。そこで私は、「物語」ということに注目しだしたわけです。糖尿病の方が海釣りに行っていて死にそうになったというの、考えてみたら一つの物語です。ただ、物語と言っているけれども作り話ではありません。

作り話と本物とをどこで分けるのか。非常に難しいですね。私が今ここで話をしているうちに、何となく迫力があるのは、やはり実際にあった話をお伝えしているからなんです。ところが、作り話と物語というのは、だんだんつながってくると思いませんか。気をつけねばならないのは、こういう話をしていると、だんだん作り話になってくる。

昔、エリザベスサンダーホームというところで、混血の子供さんたちを助けて、ホームをつくって育て上げられた澤田美喜さんという素晴らしい方がおられました。その方がエリザベスサンダーホームをつくることになったのは、電車に乗っていたときに、自分の上には何か訳の分からない荷物があつた。乗務員が来て開けるのを見ていたら、それは混血の

講師 河合隼雄（文化庁長官）

赤ちゃんの死体だったそうです。そのころ日本は戦争に負けたあとでしたから、たくさんアメリカの兵隊が来て、いろいろ混血の子供ができて、育てられない人が子供をそういうところに捨てたりしていたんですね。それを見た澤田さんは、何とかしてこの混血児たちを救おうと、エリザベスサンダーホームをつくられたわけです。しかし、お金が要りますから、澤田さんはあちらこちらへ行き、なぜエリザベスサンダーホームをつくるようになったかという講演をして歩かれるわけです。

ところが、意地が悪いというか、研究熱心というか、澤田さんの講演録を全てチェックしていた人がいるのです。そうすると、澤田さんが電車に乗って、ついうとうとしていたら上から荷物がドサンと落ちてきて、ハッとと思って開けたら、それは混血児の死体であった、というふうに、だんだん劇的になってきていることに気がつかれたのです。物語は話しているうちに劇的にしたくなるというのは、私は人間の心理かなと思います。

皆さん、笑っておられますけれども、自分もやっていることに気が付いておられますか。例えば、釣りに行って、「約 30 センチの魚を釣ったけれども、逃げてしまった」と言う人っているのでしょうか。「こんな大きさの魚だった！」と、手がブルブル震えて、こう手を大きく広げて説明したりするじゃないですか。あれは何を言いたいかと言えば、魚の大きさではない。自分の感激と残念さです。自分の感激と残念さを相手に伝えようと思ったら、やはりお話をしないと伝わらない。しかも、相手によって少し変えられるでしょう。よく釣りのわかる人には手も少し大きめに開いて、分からない人には、さらに大きめに開いたりして。(笑) そこで個別性が出てくるんです。

### 深い体験の世界をみんな持っている

「こんなすごい事はなかった」というのを一番上手く言っている昔話と言えば、「桃から生まれた桃太郎」がピッタリきますよね。それから一寸法師。昔にできた話を今でもしょっちゅう話題にして、子供も喜んでいる理由は、「大昔は珍しいことに、桃から人は生まれるし、おわんの舟で行く人はいるし、オオカミはものを言うし」などということではなく、人の体験をピタッと伝えようと思うと、その物語が一番適しているわけです。その物語の中で、皆さんご存知のように、人間もオオカミも、時には魚も、時には木やら石まで、みんな一緒にものを言い出します。これは言ってみれば、何かそういう非常に深い体験の世界を私たちは持っている。

近代科学の進歩・発達とは別に、しいて言えば逆のほうに、先に人間と人間の間関係と言いましたが、人間と人間どころか、人間も植物も、人間も動物も、みんな関係があるような世界を私たち日本人は昔から持っている。先ほど、文明が発達するほど人間はそれほど

幸福にならないというのは、我々は昔の時代の、自分の体験したことを物語として語り、その物語の中で人間が動物とも植物とも関係があった時のことを少し忘れすぎているからではないかと私は思うのです。近代科学てきな視点で言えば、私の話が良かったからといって、花が拍手をしてくれたりすることは絶対ないと思います。ところが、心の深いところまで辿って行って、人間というものを考え出すと、そういうことがあっても、そういうふうに感じて不思議ではないのではないかと、私は思っています。

そういうことを全部込みにして人間というものを考え直さなければ、うわべで大変進歩を遂げた近代科学の視点だけで世界を見てみると、みんなだんだん切れてくる。私が言いましたように、上手いことボタンを押したら、うちの子は学校へ行くのではないかと、という考え方がまん延してきて、最先端の方法で順序よくやったら良いことが起こると、みんな思いすぎているのではないですか。でも、人間と人間の関係が出てきた途端に、そんなにこちらの思い通りにいくとか、思った通りにできるということが可能でなくなるのに、何かみんなが可能だと思っている。

### 人と人、人と自然の深い関係性が大切

ある子供が言いました。むちゃくちゃやっている子ですが、「どうしてそんなにむちゃくちゃやっているの」と聞いたら、「私は居場所がないんです」と言う。「家も居場所ではありません。学校も、もちろん居場所ではありません。街へ出て行って、ぐちゃぐちゃやっているグループに入ったら、ワーと一緒に楽しくできるから、居場所みたいに思う」と言うので、その家に行って「お宅の子供さんは、お宅の家を居場所と言っていないよ」と言ったら大変怒られますよ。「何を言っているんですか。うちの家ほど居心地のいい家はありません。冷暖房完備で、食べ物は十分にあります。おやつもあります。小遣いもあげています」と、項目でいうと全部マルです。何が無いといたら、私が言いましたような、本当の深い関係が無いのです。深い関係というのは、冷暖房とかそんなのではない。「おお」と言ったら「おお」と、それだけで安心だという感じですね。この感じが家の中から無くなっている。家の中の温度とか、整理整頓されている環境とか、栄養バランスの取れたサプリメントとか、頭ばかり使っているうちに、だんだん関係が薄れていったのではないのでしょうか。

その子が言いました。「悪い試験結果を持って帰ったら、お母さんが『駄目でしたね。次に期待しておりますよ』と言う。」子供にしたら、「何よ、これ」と泣き叫んでくれたほうがよっぽどいいんだけど、お母さんにしたら、良いことをやらなくてはいけないと思うから怒れない。やっておられることはどこも悪くない。しかし、その子は言いました。

第3回 KOSMOS フォーラム  
基調講演「人間の科学」



講師 河合隼雄（文化庁長官）

「お母さんがそう言った途端に、家中が氷になりました」と。口では「いいですね」「期待していますよ」と言っているけれども、心の中では「あなたはもう、うちの子じゃありません。こんな点数を取る子はうちには置いておけないんです」というような信号がどこからか出てくるのです。そんな状況では、その子がおかしくなって当たり前ではないですか。「こんな点数！」と怒って、破って「駄目！」と言っているほうが、よほど関係ができます。子供も「それならお母さん、一度受けてみ」と反抗もするでしょうが、そう言えるほうが人間が生きている。

ただ最後に申し上げたいのは、だからと言って、自然科学とか技術はやめなさい、放りなさい、と言っているわけではありません。それがなかったら我々は生きていけません。それもいいけれど、私が言いましたような深い関係を持つのも大切で、両方をやらねばならない。これが現代の、我々の非常に難しいところだと思うのです。

単純に物事を考える人は、「昔の自然に帰れ。人間は自然に帰ったほうがいい」なんていうことを言います。私はよく冷やかして、「あなた、自然に帰れと言いながら、どうして新幹線に乗って講演先へ行ってるの」と言うのです。本当に自然に帰りたかったら、歩けばいい。裸で歩いて行けばいい。きちんと冷暖房完備した新幹線に乗って講演に行って、自然に帰れ、昔に戻れ、では駄目でしょう。

だから、自然と、私が言いました人間との深い関係性も、もう一度掘り返して、その考えを持ちつつ、科学技術もやっていくという、非常に難しい時代が 21 世紀ではないかと思っています。難しいことですが、「矛盾して難しい」ということをはっきり自覚すると、私はできないことではないと思っていますので、そこを考えながら生きていくべきではないかと思っています。